

全釋源氏物語

卷三



松尾



松尾 聰

全釋 源氏物語

卷三



筑摩書房版

全釈 源氏物語 卷三

花宴・葵・賢木・花散里

定価 一、六〇〇円

昭和三十四年七月二十日初版第一刷発行
昭和四十二年八月二十日初版第二刷発行

著者 松尾 總

発行者 竹之内 静雄

印刷者 多田 基

發行所 株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京 〇七六五一（代表）
振替 東京 四一一二三

凡 例

卷一のはじめに付けた凡例のなから、この巻にも関係のある事柄をえらび、さらに新しく一、二補うべきことを加えて、次にかゝげることとする。

一、本書は「本文」と「口訳」と「注」とから成っている。「本文」を下段に置き、その本文に当る「口訳」を上段に掲げ、口訳だけでは説明に欠けるとあると思われる語や句については、本文中のそれらの部分の右肩に漢数字の番号を付し、本文のあとにその番号を頭において、それらの「注」を施した。「口訳」のなかで、歌はすべて（二字下げに組んで）散文訳だけをかゝげたから、下段本文中の原歌を参照されたい。

一、本文は池田亀鑑博士の「源氏物語大成校異篇」の底本に換った。源氏物語の伝本には本文のはし／＼において若干の異同があり、現在のところ、伝本は、その本文によっていわゆる青表紙本・河内本・別本に三大別されているのであるが、なかで、青表紙本が最も原形に近いものと考えられている。青表紙本は藤原定家が家の本とした一証本であって、「花散里・柏木・早蕨」の三帖は定家自筆の原本が現存しているが、他は散佚（さんいつ）してしまつて、その忠実な伝写本も、完全に近い帖数を保有しているものは極めて稀で、大島雅太郎氏蔵吉見正頼旧蔵飛鳥井雅康自筆本

をもって随一とするといわれる。この本は、大内政弘が、貴重すべき青表紙証本を当時の名筆であった権中納言飛鳥井雅康（永正六年〔一五〇九〕十月没）に依頼して、複本作成の意味で忠実に写さしめたものと推定されているが、現在では、第一帖桐壺・第五十四帖夢浮橋の両帖は別筆であり、浮舟の一帖はこれを欠く。このうち浮舟の欠帖は恐らく偶然の脱落であろう。又、桐壺・夢浮橋の両帖は、もと雅康自筆の両帖を、正頼が家本を重からしめようとて、聖護院道増（近衛尚通の子種家の弟）・道澄（種家の子）に書写を依頼して、その成れるものを以って雅康自筆の両帖と入れかえたものと判定される。こんなわけで、雅康自筆本だけをもってたゞちに底本とはなしがたいので、池田博士は、花散里・柏木・早蕨の三帖は現存の定家本を用い、桐壺・夢浮橋の二帖、および浮舟には雅康自筆本に次ぐべき地位をもつという池田博士本（伝藤原行能等各筆）を採り、又、初音は雅康自筆本が別本系統の本文を伝えているために、同じく池田博士本を用いて底本としている。但しその他の帖々は、すべて雅康自筆本が底本である。

一、大成底本本文を本書の本文として採用するに当っては、句読点を施し、段落を立て、仮名には適宜漢字を宛て、仮名づかいを正し、会話の部分（ときには心中語の部分にも）には「かぎ」を施して、読みやすいようにした。なお原本本文に「御」をあててある語は、少なくともあるものについては「おほん」と読むべきかとも思われるが、通説に従って、「御とき」を「おほんとき」と読むほかは、すべて「おん」と読んでおいた。但し「御らん」については「ごらん」と読むべきであろう。なお「おまへ・おもと・おまし・おもの」などに限って「御」にあたるものが「お」と仮名書きされることがあるが、「お」につづく語が「マ行」にはじまるものであることから見れば、これらもそれ／＼「おんまへ・おんもと・おんまし」と読まるべきものかもしれない。これら原本本文に仮名書きされ

ている「お」は、本書の本文でも仮名で示した。原本文に漢字をあててある動詞に送り仮名が添えられていない場合は、ふつうの読みに従い、音便で読むべきかとも思われる「思たまへましかは」なども「思ひたまへましかば」と「ひ」を送って読んでおいた。

一、本書の本文は一切改めないことをもって原則としたが、稀に明らかに誤りと認められるものについては、仮りにこれを改めて、その旨を「注」に記した。また誤りかと疑われるものについては、その旨を「注」に記すと共に、できるだけ他本の異文を「注」に掲げた。

一、口訳は、いちじるしい不自然感を覚えさせない限りにおいては、逐語直訳を旨とし、みだりに説明のことを補わないで、原作のおもかげを保持することにとめた。

一、口訳にあたって、現在会話には用いない「である」体避けて、会話に用いる「ます」体採ったのは、当時の物語は、作者が自ら話して聞かせる代りに書きつづったもので、従って読者は（作者に代って）声に出して他人又は自らに読み聞かせたものと考えられるからである。

一、普通の注釈書では、本文中の会話には、話者の主体を示す人名の略号を付記し、又、口訳文中には、できるだけ主語を補って、読みやすくすることにとめているが、ともすれば原作の味をそこなうことが多いのを考慮して、本書では、本文においては一切そのことを廃し、口訳文においては、誤られやすい場合をのぞいて、できるだけそれを控えた。

一、口訳は現代仮名づかい・当用漢字に従うようにとめた。口訳文の中の「御」は、振仮名を施さない場合は、すべて「い」と読まれたい。

一、注は、一般読者が本文理解に必要と思われる範囲内において、なるべくくわしく施すようにつとめた。一冊のなかで、同じ言葉に対する同じ注をくりかえしていることがあるが、読者の便を慮ったためである。

一、古来異説のあるものについては、一理ありと判断される限りは、なるべく諸説を注記するように心がけたが、次項にのべるような事情のほかに、紙幅の都合もあって、必ずしもすべてを尽くしているわけではない。

一、諸説は、広汎かつ精細・正確な研究史的な調査を完了した上で、これをかゝげるべきであつたが、そうしたことは、資料的にも、時間的にも、今の私には到底できないので、その説が誰によつてはじめて提唱され、誰によつて支持され、あるいは批判されたというようなことには、あまり重きをおかないで、たゞ私が気がついた範囲での諸説そのものの内容——それも多くは現代諸家の諸説について——を主として、簡単に並べあげることにした。従つて、当然かゝげるべき卓説なり芳名なりを落して、諸家に対して札を失していることも多いかと思われる。御寛恕を願いたい。

一、この巻の口訳および注を施すにあたっては、藤原伊行の「源氏釈」、四辻善成の「河海抄」、一条兼良の「花鳥余情」、三条西実枝の「明星抄」、中院通勝の「岷江入楚」、北村季吟の「湖月抄」、契沖の「源註拾遺」、賀茂真淵の「源氏物語新釈」、本居宣長の「源氏物語玉の小櫛」、石川雅望の「源注余滴」、萩原広道の「源氏物語評釈」、宮田和一郎氏の「頭註対訳源氏物語」、金子元臣氏の「定本源氏物語新解」、島津久基博士の「対訳源氏物語講話」、吉沢義則博士の「対校源氏物語新釈」「源語釈泉」、佐伯梅友博士の「源氏物語新抄」、池田亀鑑博士の「日本古典全書源氏物語」、山岸徳平氏の「日本古典文学大系源氏物語」、北山籍太氏の「源氏物語の語法」「源氏物語のことばと語法」「源氏物語辞典」、谷崎潤一郎氏の「新訳源氏物語」、佐成謙太郎氏の「対訳源氏物語」などの学恩を被る

ことが甚大であつた。記して謝し奉る。なおこれらの諸書は、河海抄・花鳥余情などについては間々学習院大学蔵写本などを参考したが、その他はすべて現行の活字本によつた。（明星抄は、国文注釈全書に「細流抄」として収録されているものが、それであるといわれるので、それを用いた。）又、それらの諸書に引用されている書（たとえば弄花抄）は、手許に確かめるべき資料がない場合は、そのまゝ孫引きしたことが多い。他日、吟味されなければならぬ。

一、諸注釈書の探索・整理、その他について常磐井（旧姓長谷川）和子氏の多大なる援助を得た。氏の厚情には深く感銘している。

一、読みさして、再び読みつゞけるときの便宜を考えて、各帖のはじめに、その帖の梗概こうがいと略系図をかゝげた。従つて、はじめから読みつゞけられる読者においては、梗概は、むしろその帖を読み終えられたのちに、目を通されることを希望する。

なま

萬彙乾坤不有也如掌中

こきうんのかうとれにちちり給ふれば

細殿 忠教に流
秘流をかうとせん席のまゝとあり

憲に廟と云ふものと琬と具とを云ふ

斗
くちあさる

弘慶殿に當りてくるとありて居あり具にあり

才之間よりあるや、格子を戸に之。

ちくのうとあきて

くろくにんくさうしやう
百葉クニヤ
くろにんくさう

萬葉
奇

河海抄(完本)

何海抄卷之五

吳江物語博士源惟良撰

第三
夕霧

卷之五

山形あるとくろ金に他てんうもあきだせ
ゆう人のふとてりりたふあね

辰季 文選
又真人

しるしをたづねてみる
とてふ山の中へ

何物物推當のふりてんてんてんてんてん

のるはうきめりとのすけぢてこのまゝよりひえわた

よきことあり

けつりなまゆふり

惠心僧都千日山親問。安養尼不為ありけしに。

目次

花宴.....一

葵.....三七

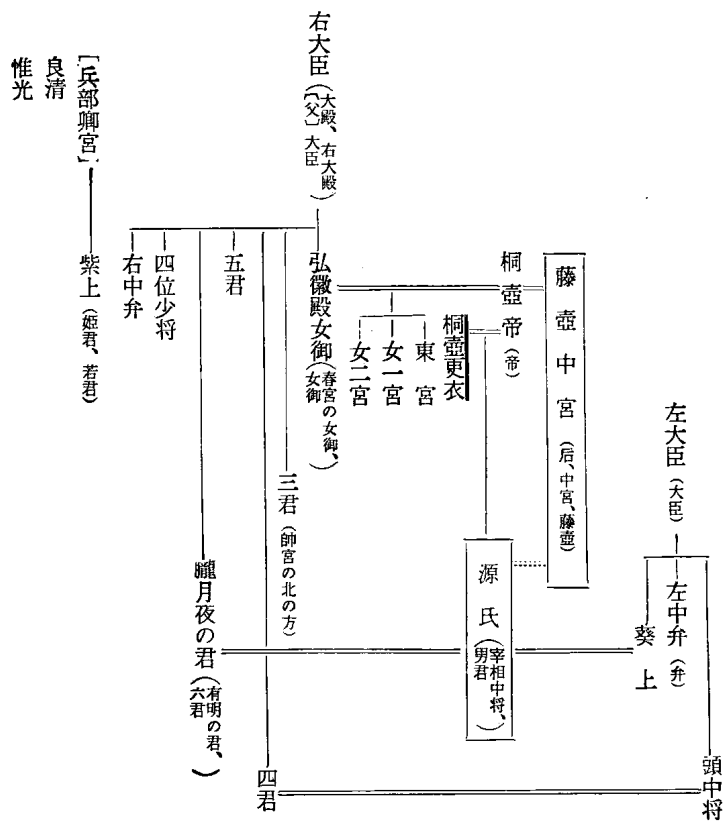
賢木.....二八

花散里.....三三

花

宴

(はなのえん)



二月二十日あまり、南殿の桜の宴が催されて、藤壺中宮、東宮、弘徽殿女御なども参上なされた。探韻を賜わって人々は詩を作った。源氏の態度は特にすぐれていた。入日の頃、源氏は、東宮の強^たつての仰せによつて春鶯囀の一節を舞い、頭中将は、柳花苑を舞った。夜が更^あけて人々も帰ってしまつてから、ほろよい心地の源氏は月明のうつくしい景色を見すこしかねて、もし隙もあらうかと、藤壺のあたりをひそかにうかがい歩くけれど、戸口はかたく閉ざされていた。弘徽殿の細殿に立ちよつてみると、三の口があいているので、のぞいてみると、並々らしからぬ女の若く美しい声で、「隼月夜に似るものぞなき」と歌いながら、こちらへ来るものがある。うれしくて、ふと袖をとらえた。女は驚き恐れるが、やがて相手を源氏と知つて、つよくこばもうとはしなかった。名のらせようとするうち、夜が明けて、人々も起きてざわ／＼し出したので、扇をしるしに取りかえて、細殿を出た。源氏は桐壺に帰つてからも、「弘徽殿女御の妹たちの一人で、恐らく五君か六君だろうが、もし六君なら、父右大臣が東宮に奉ろうとしているものを、気の毒なことをした。いづれにしてもどちらか確かめたい。」と思つてゐる。葵上に無沙汰していることが心苦しかったが、紫の君のことが気が／＼りなので、機嫌をとりてまず二条院を訪ね、それから左大臣邸へ行つた。葵上は、例のとおりすぐにも対面なさらない。左大臣や頭中将たちと音楽のあそびをした。隼月夜の女君は、六君であつた。東宮への入内を四月にひかえて、はかなかつたあの夜の夢に思ひなやんでいる。三月二十日あまりに右大臣邸で弓の試合に引きつゝいて藤の宴があつた。右大臣からの強^たつての迎いで、源氏はおくれてでかけて行つた。夜が少しふけた頃、ひどく酔つたふりをして、座を立て、寢殿の東の戸口にゆき、妻戸のみ簾をかぶつて入^{はい}つて、「扇をとられてからき目を見る」と歌うと、時々ため息をつくけはいがするの

で、几帳^こごしに手をとらえると、それが隼月夜の君であつた。

二月の二十日過ぎに、南殿なんでんの桜の宴をお催しあそばされます。后と東宮の御座所を玉座ぎよくざの左右さゆうに設もうけて、お二所ふたところが参上さんじやうなさいます。弘徽殿の女御は、藤壺の中宮がこう時めいていらっしゃるのを、ものの折毎に、穏やかならずお思いになりますけれど、物見には、見逃ぬがすことがおできにならないで、参上さんじやうなさいます。たいへんよく晴れて、空の様子、鳥の声も氣持よさそうな中で、親王みこたち上達部かんだちめをはじめとして、その道の人は、皆探韻たけんをいたゞいて、詩をお作りになります。宰相の中将——源氏の君——は、

「春という文字をいたゞいております。」

とおっしゃる声までが、例のとおり、人とは違ちがっています。次に頭中將、これは見る人の目移しも尋常ではなく感じるはずのことであるようですけれど、たいへん体裁ていさいよく落ちついて、声づかいなど、重々しく、すぐれています。その外の人々は、皆氣おくれしがちで、きまり悪がっている者が多いことです。地下じげの人はまして、帝、東宮が御学才おんがくさいが深くすぐれておいでになり、こうした方面に、高貴な

二月ふたつきの廿日はつかあまり、南殿なんでんの桜の宴うたげさせ給ふ。后きさき、春宮とうぐうの御局おんきやう、左右さゆうにして、参上さんじやう上り給ふ。弘徽殿の女御、中宮のかくておはするを、折節せりふしごとに安からず思おもせど、物見ものみにはえ過すくし給はで参り給ふ。目いとよく晴れて、空の氣色けしき、鳥の声も心地よげなるに、親王みこ達部だちめよりはじめて、その道みちのは、皆探韻たけんはりて、ふみつくり給ふ。宰相さいしやうの中將、

「春といふ文字もじ賜はれり。」

と宣のたまふ声さへ、例の、人に異ことなり。次に頭中將、人の目移めうつしもたゞならず覺ゆべかめれど、いとめやすくもてしづめて、声づかいなど、ものゝくしくすぐれたり。さての人々は、皆臆おそしがちにはなじろめる多おほかり。地下じげの人は、

方がたくさんおいでになる時世じせいですので、恥はづかずかしく、ひろくと晴はれわたっている庭に進み出るとき、間まが悪くて、詩を作るのはやさしい事ですけれど、つらそうです。年をとっている博士たちが、身なりが変にみすばらしくて、しかもいつも場馴ばなれがしているのもしみぐと心にせまって、各人各態かくじんかくたいと主上は御覧になるのがおもしろい事でした。いろ／＼の舞樂などは、いうまでもなく立派に御用意あそばしていらっしやいます。だん／＼入日いりひになる頃、春の鶯うさぎがさえずるといふ舞が、たいへんおもしろく見えるのにつけて、源氏の君の、紅葉賀の御折おんのことを、自然お思い出しになって、東宮は挿頭かざしの花をお下くだしあそばして、是非にと御所望あそばしますので、辞退できかねて、立ち上って、ゆるやかに、袖をひるがえす所を、くぎり申訳ばかりにお舞いになっていきますのに、似るはずのものもなく美しく見えます。左大臣は恨めしさも忘れて、涙をお落しになります。

「頭中将はどうした。はやく。」

まして、帝春宮の御才みのかみかしこくすぐれておはします、かゝる方かたにやむことなき人多くものし給ふ頃なるに、恥はづかしく、遙々はる／＼と曇くもりなき庭に立ち出づる程、はしたなくて、やすき事なれど苦しげなり。年老いたる博士はかせどもの、なりあやしくやつれて、例馴れなれたるもあはれに、さま／＼御覧するなむ、をかしかりける。楽がくどもなどは、さらにもいはず調とへさせ給へり。やう／＼入日いりひになる程、春の鶯うさぎさへづるといふ舞、いとおもしろく見ゆるに、源氏の御紅葉の賀の折、思し出でられて、春宮、かざし賜たまはせて、切せきに責め宣のたまはするに、のがれ難くて、立ちて、のどかに、袖そでかへす所を、ひとをれ気色けしきばかり舞ひ給へるに、似るべきものなく見ゆ。左の大ひだり臣、うら

と勅みことりがありますので、柳花苑という舞を、これは、もう少し長く舞って、——こういう事もあろうかと、心つもりをしていたのでしようか、——たいへんおもしろいので、御衣おんぎを下賜されて、たいへん珍らしい事と人々は思っています。上達部かんだちめは皆次第もなくお舞いになりますけれど、夜になってからは、特に上手下手じょうすへたの見分けもつきません。詩などを披露するのにも、源氏の君のお作は、講師もよみお、せることができないで、一句毎に誦ずんじて大さわぎをします。博士たちの心中しんちゅうでもひどく感心しています。

めしさも忘れて、涙落し給ふ。
「頭とう中將ちゅうしやう、いづら。遅し。一
とあれば、柳花苑といふ舞を、これは
今少いませうし過すして、かゝる事もやと心づか
ひやしけむ、いとおもしろければ、御
衣賜ぎはりて、いと珍めづらしき事に人思へ
り。上達部かんだちめ皆みだれて舞ひ給へど、夜
に入りては、殊にけぢめも見えず。ふ
みなど講ずるにも、源氏の君の御みをば、
講師かうじもえよみやらす、句ごとに誦ずしの
のしる。博士はかせどもの心にもいみじう思
へり。

(一) 南殿の桜の宴 「南殿」は紫宸殿のこと、その階前の左方に桜がある。紫宸殿で桜を御覧ののち、宴は清涼殿で開かれるといふ。(二) 后 藤壺中宮のこと。(三) 春宮 弘徽殿女御腹。のちの朱雀院。(四) 参う上り 「まう」は「まゐる」の音便。この「まゐる」は古くは上一段自動詞であった「まゐる」の連用形(万葉集にわずかながら用例が見える)が、複合動詞「まゐるのぼる」↓まうのぼる」の一部にのこったもの。(五) かくておはする 主上の左右に東宮と並ぶというような待遇をうけて時めいておいでになる。(六) 上達部 公卿すなわち三位以上のもの。たゞし参議は四位でもその列に入る。(七) その道 詩文の道。(八) 探韻賜はりて 探韻は韻字(漢詩文で、韻を踏むために句の末におく字)を自分で探りとして、その韻で詩を作ること。「賜は